

江戸時代における若衆道

クイッティネン・マリア

1. はじめに

現代の日本では、同性愛は一般的に非難されるが、明治時代以前の風習では同性愛が広く受け入れられていた。この「男色」や「若衆道」¹などという風習は日本では奈良・平安時代の公家・僧侶の社会で初めて広まり、その後の武家社会にも影響を与えた。そして、江戸時代に入ると、若衆道は大きな変化を遂げ、性風俗の一つの姿になった。

男色の風習は日本だけではなく、世界中の色々な国や時代にもあった。例えば、古代ギリシア・ローマで行われた男色は周知の事実である。しかし、キリスト教がヨーロッパに登場した後、同性愛は罪と考えられ、日本の場合と事情が異なった。そのため、キリスト教の宣教師は初めて来日した際に、日本人の「言語道断な行為」に憤慨した。

本稿では、江戸時代における若衆道を中心とし、それ以前の歴史も調べ、男色の変遷について検討したい。また、日本の若衆道の特徴を古代・中世ヨーロッパと比較しながら考察していくことにする。

2. 江戸時代以前

2.1 奈良・平安時代の僧侶、公家の社会

Leupp(1995, p. 11)によると、日本は歴史の記録が東アジアの基準から見ると短く、男色に関わる記録もかなり曖昧である。それに対し、日本が影響を強く受けた中国では、男色の記録を紀元前6世紀にまで遡ることができ、中国の皇帝が行った男色についても記録が残っている。日本では、『日本書紀』(720)や『万葉集』(759)に男色の記録が見られると唱える研究者もいるが、Leupp(1995, p. 22)によれば最初の明白な証拠は985年に遡る。平安時代の最も有名な書物である『源氏物語』(1010頃)には、主人公の光源氏が先ず女性の空蝉に懸想したが、「なかなかその想いがかなえられないので、代わりに空蝉の弟、小君という少年と床を共にしたという」と白倉(2005, p. 16)は述べている。白倉によれば、この時期男色と女色には特別な区別がなく、源氏にとっては女性でも男性でも大差がなかったことが窺える。公家が寵愛した男子は美少年で、化粧をしたり女装をしたりしていたので、女との区別がとまかく難しかった。Leupp(1995, p. 25)によると、『源氏物語』は小説であるので不明瞭だが、平安時代の公家を書いた日記にも男色についての記述がある。例えば、

¹ 頼(2008, p. 147)によると、「若衆道」とその略語の「衆道」という言葉が使い始められた年代は確定されていないが、江戸時代から広く使われていた。

藤原頼長(1120-1156)は男性の召使や貴族との性的経験を記録した。しかし、中国と比べると、日本には公家の男色に関する記録が少ない。

僧侶社会では、公家社会よりも男色が盛んに行われていたという記録がたくさん残っている。その記録は僧院で書かれた聖句である。Leupp(1995, p. 31)によると、男色についての最初の明白な記録は天台宗の僧侶の源信(942-1017)が書いた『往生要集』(985)に見られる。源信は他人の稚児を強姦することを非難し、そんなことをした者は地獄に落ちると述べている。

僧侶社会と男色の間には強い結びつきが見られ、真言宗の創始者である弘法大師が初めて男色を中国から渡来させたと言われるほどである。しかし、渡辺(1989, p. 35)は弘法大師の伝記には男色の明白な証拠を認めておらず、「日本人は弘法大師の前から男色を知っていたようだ」と述べている。すなわち、弘法大師は天才として知られ、仮名の発明もしたと信じられているが、男色を生み出したはずがないということだ。男色が中国からの輸入かどうかははっきり知られていないが、日本の僧侶社会の男色は中国と比べれば顕著であった。中世の日本は、仏教の僧院が多く、女性がいらない人里離れたところにあった。そして、この時期の仏教は女性を遠ざけており、女色は禁じられていた。僧侶は論理的には独身生活を送るが、男色は容認されていた。

僧侶社会の男色では、年上の僧侶すなわち「念者」が10-17歳の稚児を寵愛したと渡辺(1989, p. 47)は述べている。Leupp(1995, p. 43)によると、その稚児は有力な家から来ており、聖職者になるためか、経典やお経を唱える訓練を受けるために僧院に入っていた。例えば14世紀から書かれた『稚児物語』という文献は稚児と念者の恋愛関係についての事実を語り、その関係が普通であることを表している。

2.2 鎌倉・室町時代の武家社会

「武家社会といえば、いうまでもなく武家の誕生とともに始まった。平家の公達をはじめ、それは公家政治の模倣に男色の風習が伴っていたがゆえにといつてよかろう」と白倉(2005, p. 21)は述べている。頼(2008, p. 149)は、男色は平安の貴族社会から鎌倉時代の武家社会に転じたが、その独自性も示していたと考えている。前の公家・僧侶の社会のように、武家社会の男色は年上の武士と年下の「若衆」の関係であった。渡辺(1989, p. 47)はその若衆は普通13-19歳だったが、20歳以上の場合もあったと述べている。

将軍の近習として初めて小姓の制度が確立されたのは足利幕府で、「とくに第3代将軍義満(1358-1408)などは、多くの美童を寵愛したことで知られている」と白倉(2005, p. 21)は述べている。義満はそのころ盛んであった田楽や猿楽などの芸能のパトロンであり、能楽の創始者となった世阿弥も寵愛した。他の将軍も若衆の魅力にまいる、Leupp(1995, pp. 52-53)には将軍や大名などの多くの有力者が若衆と性的関係を持っていたとある。例えば、源頼朝(1147-1199)、徳川家康(1542-1616)、織田信長(1534-1582)などが男色を行っていた。

しかし、男色は主君と小性の関係だけではなく、武士同士の間でも行われた。白倉(2005, p. 23)によると、この同輩関係の男色も年長者と年少者との契りであり、「義兄弟関係」と呼ばれていた。武家社会は僧侶の社会と同じように、女性あまりおらず、男対男の関係の方が女色より高く評価された。また、戦争の中で生死を共にすることで男色が強化され、戦場で恋人に勇気を示すために自分の能力を発揮することもあった。それについて、白倉(2005, p. 22)は「人間同士の信頼、愛情といった面で、男対男の関係の方が優位に立つという傾向があったともいえる」と述べている。しかし、平和な江戸時代に入ると、武家社会は大きく変化し、男色も様変わりした。

3. 江戸時代

3.1 町人層の参入

平和で豊かな江戸時代では、武士の武芸が不要になった。そして、戦乱がなくなると、武士の義兄弟関係は有効ではなくなり、逆に秩序を乱す恐れも出てきたので、藩によっては禁止されたところもあったと白倉(2005, p. 24)は述べている。江戸時代でも武士は男色を行ったが、その形はしばしば変わった。Leupp(1995, pp. 58-60)によれば、武士は16世紀に行われた兵農分離によって大名の城の近くに居住させられたが、多くの庶民もまたそこに引っ越した。それに伴い、その城下町は人口が多くなり、中産階級が繁栄することとなった。そして、貨幣経済が発展し、売春宿も設けられた。白倉(2005, p. 39)によると、男色は上方から武家社会として形成された江戸へ伝播し、売春宿で行われる商業になっていた。それについて、Leupp(1995, p. 65)は「売春は世界で一番古い職業と言われるが、日本のよく組織された認可売春は豊臣秀吉が支配した時代(1582-1598)に遡る」と述べている。江戸時代の売春宿は、女色も男色も提供し、客はその両方を最良にしていた。しかし、白倉(2005, p. 29)によれば、男色の方が江戸時代でも高く評価され、粋人としての嗜みと考えられていた。この考え方は前の武家社会から影響を受けたと思われる。そして、高い評価を表すためかどうかは知られていないが、江戸時代には男色について「若衆道」とか「衆道」という言葉が広く使われ、「あたかも「道」の世界があるかのように振舞う必要が生じたのだ」と白倉(2005, p. 28)は述べている。

江戸時代以前には男色は個人対個人の関係であったが、江戸時代に入ると金銭で行われる風俗になった。Leupp(1995, p. 66)によると、武士にとっても男娼を雇うのは契りや契約がある義兄弟関係より便利であり、風俗が発展すると同時に義兄弟関係は減少していった。

3.2 歌舞伎芝居の役者の売春

男色の売春は普通「茶屋」という店で行われたが、歌舞伎芝居との結び付きが強かった。茶屋は歌舞伎芝居の近くにあり、歌舞伎役者は客の要請によって茶屋に呼ばれた。その役者は歌舞伎芝居に雇われていたが、舞台には出演せず、売春を専門とする「陰間」の場合

も多かった。歌舞伎が大人気になった理由は、役者の性的な魅力であるとも考えられる。渡辺(1989, pp. 76-79)によると、以前の能楽も同じように男色と関係があったが、江戸時代には歌舞伎が一番の人気になった。

歌舞伎は江戸初期に女歌舞伎として始まったが、遊女役者が観客に混乱を引き起こしたため、女歌舞伎は幕府によって1629年に禁止された。その結果、役者が美少年である「若衆歌舞伎」が登場した。しかし、特に女性の役割を果たした「女形」の若衆役者は性的な注目を集めたので、女形も1642年に禁止になった。そして、白倉(2005, p. 4)によると、他の若衆役者も庶民を暴力へと駆り立てることで責められ、1652年からは前髪を剃ってしか舞台に上がることが許されなくなった。前髪は若者の美貌を象徴し、それなしでは「見苦しい」とLeupp(1995, p. 131)は述べている。しかし、この「野郎歌舞伎」の役者は額にスカーフを巻いており、男性の性欲の象徴としてその紫色のスカーフも性的な意味を含むようになったとLeupp(1995, p. 132)は述べている。また、渡辺(1989, p. 84)によると、前髪を剃らなければならなくなった役者が皆それに従うと、役者は以前より長く働くことができるようになり、肉体美よりも技能が大切になった。

江戸時代の若衆歌舞伎には、異なる役割があった。白倉(2005, pp. 35-36)はそれらを三つの種類に分けている。「舞台子」は舞台に出演したが、「陰子」は舞台には出ず売春を専門としていた。それから、「飛子」という者は地方興行について歩き、行く先々で売春をした。しかし、呼び方は異なったものの、どの役割の者も売春を行った。客は男性だけではなく、女性も歌舞伎役者のサービスを買った。ランクの高い役者と性交したければ、値段もとても高くなった。Leupp(1995, p. 72)によれば、とても上品な男娼は遊女よりも高値であった。

茶屋で行われた男色の記録として、たくさんの男色春画というエロチックな浮世絵が残っている。この春画には男娼と客の性交が描いてあり、二人とも服を着ているのだが生々しい絵が多い。そして、男性と一緒にいる遊女の絵がたくさんあり、両性愛的な雰囲気を作り出されているとLeupp(1995, p. 79)は述べている。また、白倉(2005, p. 65)によると、特に江戸の画師は「三人取組」の絵柄を描いたとある。江戸時代はそれ以前の公家社会と同じように、男色しか行わない者は珍しく、両性愛者が多かった。

Leupp(1995, p. 80)によると、浮世絵が人気になると同時に、男色に関する書物も広く読まれた。印刷技術が発達し、需要も多かったので、男色をテーマにする物語がたくさん出版されていた。例えば、『田夫物語』という男色と女色を比較的に論じる仮名草子が1640年頃出版された。そして、井原西鶴(1642-1693)という散文家が男色についてよく書いていた。井原の『男色大鏡』(1687)という書物は「男色風俗の百科事典」とも言える(白倉, 2005, p. 40)。武士の男色についても江戸時代に著された記録があり、もっとも有名なのは『葉隠』(1716)という書物だろう。



若衆歌舞伎の役者と武士の性交を描く春画（古山師重、1695頃）

<http://www.ukiyoe-paintings.com/s4-4.html>

3.3 両性具有と性的な役割

平安時代の公家社会から江戸時代の若衆歌舞伎にかけて、両性的な様子は人気であった。それについて、白倉(2005, p. 17)は「いわゆる児小性やのちの『若衆(陰間)』の風習は--男であって女でもあるという、美少年の両義性すなわち両性具有の美を具体的な形姿として見出したことを意味している」と述べている。そして、Leupp(1995, p. 174)は次のような詩を引用している。

女かと思れば
男のまのすけ
ふたなり平の
これも面影
(1644)

この詩は、女形の *Shimada Manosuke* の両性具有を高く評価したものである。Leupp (1995, p. 175)によれば、両性具有は江戸時代になると人気が最高潮に達し、その人気は異性の衣類を身につける歌舞伎役者に反映していた。つまり、江戸時代には、はっきりした性別の役割がなく、男性も「美しさ」で高い称賛を得ていたのである。

性別の役割はあまりはっきりしていなかったが、それに対して上下関係は江戸時代でも厳格であった。性的な役割は、年下の若衆はほぼ必ず犯された者であり、男娼はいつもその役割を果たしていた。白倉(2005, pp. 49-50)によれば、される側の若衆は苦痛なのだとい

い、成年に達するとともに異性愛に戻っていくのはそのせいであろうとある。

3.4 男色の社会的受容

Leupp(1995, pp. 146-156)によると、徳川幕府は武士や庶民の精力を抵抗からそらすために売春を認め、男色茶屋にも免許を与えた。その茶屋には実際には免許がなかったが、罰せられなかった。そして、大名も若衆を好み、男性全員が男色の傾向があると考えられていた。そのため、なぜ美少年に興味があるのかより、なぜそれがないのかという疑問の方が的確であった。白倉(2005, p. 53)も「女ばかりに馴染んでいる者は、向上心が足りないだけだ」と述べている。しかし、幕府は売春を認めたが、武士が仕事から目をそらすほどは若衆にふけられないようにと忠告したとLeupp(1995, p. 146)は述べている。

江戸時代には武士も庶民も男色を多く行ったが、女性に興味がなかったとは限らない。実際、ほとんどの男性は女性と結婚し、先にも述べたように両性愛が一般的であった。武士も少年の時若衆の役割を果たし、元服した後は念者になったが、結局は女性と結婚した。Leupp(1995, pp. 101-102)によれば「女嫌い」という女性を嫌う男性もいたが、それは少数であった。後継者を作ることの大切さは認められていたので、結婚は必要だった。

若衆歌舞伎は幕府に禁止されても、それ以外に男色を禁じる法律はなかった。歌舞伎役者がパトロン之家に泊まることはできないという規則があったが、男色は法律で大抵認められた。最も重大なことは、Leupp(1995, p. 170)によれば日本における男色が例えばヨーロッパのように「不自然」として考えられていた記録はない。男色売春にはいくつかの制限があったが、それは社会秩序の維持のため課されたものであった。例えば若衆歌舞伎の場合、奇麗な役者が庶民を暴力へと駆り立てることもあったので、結局若衆歌舞伎は法律で禁止になった。しかし、それは社会の秩序のためになされたものであり、男色全てが非難されることはなかった。

4. ヨーロッパ社会における男色

フランシスコ・ザビエル(1506-1552)というイエズス会の宣教師は1542年に訪日し、キリスト教を初めて日本に紹介した。渡辺(1989, pp. 19-21)によると、ザビエルは日本人の知能や強い道義心を称賛したが、当時広く行われていた男色には震え上がった。この「ソドムの悪徳」を禁止するキリスト教に対し、日本における仏教は男色を容認し、僧侶と稚児の恋愛関係も認めていた。イエズス会の宣教師はキリスト教の教えや男色の悪徳について説いたが、日本人の改宗者は少なかった。織田信長は仏教を嫌い、自分の目的のためにキリスト教を利用したが、彼が死んだ1582年以後キリスト教は日本から追放された。そのため、男色はキリスト教の判断を仰ぐことなく江戸時代にも繁栄した。

ザビエルの時代のヨーロッパでは、同性愛はもう長い間キリスト教によって非難されていた。しかし、キリスト教が登場する前は男色が広く行われた社会がヨーロッパにもあった。男色の起源とも考えられている古代ギリシアから始めよう。

4.1 古代・古典ギリシア

Crompton(2003, p. 2)によると、同性愛はギリシアの文化の中で紀元前600年から紀元後400年頃にかけて名誉ある地位にあった。古代ギリシア(紀元前776-480)で書かれた詩や物語は今は断片しか残っていないが、そこには男色の記録が見られる。古典ギリシア(紀元前480-323)は都市国家の文化が最も興隆した時期であり、悲劇や詩、哲学が栄えた時期であった。そして、その中には同性愛的なテーマが多かった。

同性愛についての最初の記録はホメロスの『イリアス』に見ることができるが、Crompton(2003, pp. 4-6)によればその同性愛的な意味は後で解釈されたものである。『イリアス』は英雄アキレウスの物語であり、ギリシア軍が小アジアのトロイを攻撃したトロイ戦争(紀元前1184年頃)の時のことを記したものである。アキレウスは総大将であったアガムムノンに怒り、戦いに出なかった。親友のパトロクロスはアキレウスの甲冑を借りて戦場に出、トロイのヘクトールに殺される。親友を失ったアキレウスは嘆き悲しみ、復讐に立ち上がり、ヘクトールを討ち果たす(海野, 2008, p. 40)。アキレウスとパトロクロスの関係は情熱的であったが、恋愛であったかどうかは問題である。『イリアス』は紀元前800年から700年ぐらいに成立したとされているので、その時同性愛はまだ広がっていなかったと海野(2008, p. 41)は述べている。しかし、紀元前600年頃から同性愛は軍隊や貴族社会で広く行われるようになった。

日本と同じように、ギリシアの男色は年長者と年少者の関係であり、犯す者と犯される者との区別があった。「ギリシアの愛は少年愛を中心としている。12歳ぐらいから20歳前までの少年を年上の男が愛する。ひげが生え、大人になったら終わりである」と海野(2008, p. 46)は述べている。愛する者は「エラステース」と、愛される者は「エローメノス」と呼ばれていた。この男色関係は男性の教育でよくあったことである。

日本とよく似ている他の点は、ギリシアの軍隊は同性愛を武芸として使っていたことである。Crompton(2003, p. 3)は古典ギリシアの有名な哲学者のプラトンの『饗宴』(紀元前385-380年頃)を引用しているが、プラトンによると兵士は恋人の前では戦場から逃げられないと述べている。『饗宴』にはこの他にも男色の記録が多く、女色より高く評価されていたと考えられる。海野(2008, p. 56)はこの対話篇に見られる考え方について次のように述べている。

恋は指導原理であり、恋する者は恋する少年に恥じないように名誉と勇気を持ち、少年もまた恋してくれる人に恥じないように振舞う。従って、恋する大人と少年のペアによって国家や軍隊を組織すれば、最良、最高のものになるだろう。

Crompton (2003, p. 10)はギリシアで同性愛が発達した三つの要素を挙げている。体育への情熱、男の裸体の受け入れ、そして男の裸体の美のカルトである。体育は戦争の訓練として始まったが、やがてそれ自体として発達し、裸で競技されるようになった。因に、「ギムナジウム」は「ギムノ」(裸)というギリシア語からきている。ギリシアで紀元前776年から行われたオリンピックでも、競技は裸体に油を塗って行われ、同性愛的な意味が強かった。裸の男性は彫刻や絵に表現され、美として見られていた。



大人と若い競技者、紀元前480年頃のコップ

4.2 ローマ帝国

紀元前4世紀後半、マケドニア王国はギリシアを占領し、古典ギリシア時代は終わった。しかし、ギリシアの文化は紀元前148年に始まったローマ期にも残っていた。Crompton (2003, p. 79)によると、特にローマの文学と芸術はギリシアから大きな影響を受けていた。ローマでも男色が行われていたが、その形はギリシアと異なっていた。ギリシアの同性愛は上流階級における友愛の関係に結び付いていたが、ローマの同性愛関係は上流階級の男性と奴隷の間のものであり、自由人はされる側になることが許されなかった。そして、売春もローマで盛んになった。される側になることへの非難について、海野 (2008, pp. 68-69)はカエサルを例として挙げている。ローマの独裁者、カエサル(紀元前

100-44年)はビチュニアのニコメデス王に愛されたという噂が立ったが、その目的は彼の名声に傷をつけることであった。海野(2008, p. 70)はこの噂について次のように述べている。

カエサルへの非難はローマの同性愛への態度を示している。同性愛は盛んに行われている。だが相手は奴隷であり、男娼である。もはやギリシアのような、愛する者と愛人との対等な友愛関係はない。愛人は奴隷であり、身分が卑しいものだ。

ローマ帝国の同性愛については色々な記録が残っている。一番古いものはヴァレリウス・マクスィムスが紀元後30年頃書いた雄弁家のハンドブックである。マクスィムスは巻VIで同性愛の罪を書き出している。しかし、その違反は法律には書かれていなかった。江戸時代の日本と同じように、ローマでは男色を明白に禁止する法律はなかったようである。他にも男色の記録は詩や物語に見られる。最初の小説としても考えられている『サテュリコン』(紀元60年頃)にも同性愛的な三角関係についての記述がある(Crompton, 2003, pp. 80-101)。

ローマ帝国における男色の変化は日本の江戸時代における変化と似ているように思われる。以前の個人対個人の友愛関係が売春に変わっていったことが両者に見られることである。そして、ギリシア、ローマでも、日本でも、年齢や立場による性的な役割の区別は厳格であった。しかし、異なる点もあった。ローマでは犯される側は卑しい者として考えられており、奴隷がその役割を果たす場合が多かった。それに対し、日本ではローマであったような奴隷との男色関係ではなく、売春を行った歌舞伎役者は高い評価を受けていた。

4.3 キリスト教の登場とその影響

キリスト教はローマ帝国が興隆した1世紀に生まれ、4世紀にローマの国教になった。しかし、キリスト教の根源は紀元前900年頃生まれたユダヤ教であり、『旧約聖書』もユダヤ教のものである。Crompton(2003, p. 32)によれば『旧約聖書』の『トーラー』という最も古い文書は紀元前550年頃に遡る。『トーラー』5巻の中の『レビ記』という一書では同性愛が禁止されている。『レビ記』18章22節によると、「女と寝るように男と寝てはならない。それは厭うべきことである」。しかし、同じ一書は、タコを食べることを禁止し、反抗的な息子を殺した方がいいとも述べている。すなわち、その時代に限った命令である。他に同性愛を禁じる命令はあまりないが、『ソドムとゴモラ』という『創世記』にある物語は同性愛を非難していると考えられる。ソドム市では男色が多く行われ、神様がそれに怒り、ソドム市を一掃したという話である。そのため、同性愛は「ソドムの悪徳」とも呼ばれるようになった。しかし、Crompton(2003, pp. 37-39)は元々その物語は自慢や不貞についてのものであり、同性愛的な意味は後で解釈されたと述べている。海野(2008, p. 83)も「『旧約聖書』におけるソドム市の悪徳は、特に男色のことではない。それが3世紀あたりから、ソドムの悪徳が同性愛と結びつけられてくる」と述べている。

イエスはパレスチナにおいて紀元後30年頃十字架にかけられ、彼の弟子たちによってキリスト教は広められていった。イエスと弟子の生活を記録している『新約聖書』は1世紀から2世紀にかけて書かれた。『新約聖書』は『旧約聖書』にある戒律を置き換えたと考えられるが、同性愛についてははっきりと述べていない。イエスも何も言わなかった。しかし、キリスト教がヨーロッパに広まってから、同性愛は非難されてきた。これはなぜなのだろうか。これについて海野(2008, p. 81)は次のように述べている。「キリスト教が普及し、認められるとともに、組織化、理論化されると、禁欲的で排他的な教義がつくられ、同性愛についても否定的な見方が現れた。そして、その曲がり角を代表するのは、アウグスティヌス(354-430)である」。アウグスティヌスは北アフリカからローマに移り住み、カトリックの理論家として『三位一体論』、『神国論』、『告白』などを書いた。『告白』の中で、若いころ男色関係を持ったと告白するが、晩年には同性愛は自然に反するものであり、神への大罪であると非難している。

キリスト教が同性愛を非難する理由は色々あるが、それより重要なのはその結果である。ヨーロッパをはじめとして、キリスト教の道徳は世界中に広がっていった。キリスト教は戦国時代に日本から追放されたが、明治時代における近代化にともない、欧米の考え方も日本に普及した。日本における男色の衰退は、キリスト教のせいだけではないが、それも大きな影響を与えたのではないかと考えられる。

5. おわりに

以上、日本における若衆道すなわち男色の風習について考察してきた。その結果、男色は日本の歴史の中でしばしば行われていたことが明らかになった。そして、日本だけではなく、ヨーロッパにも男色が広く行われる社会があったことも分かった。現代の日本では、同性愛は禁止されていないが、隠した方がいい、少し卑しいこととして考えられている。しかし、本研究では同性愛嫌悪は日本の文化に根差しているものではないということが分かった。歴史的に言うと同様は両性愛同様に普通のものであり、実際独占的に異性愛が行われる社会は珍しい。古代ヨーロッパを検討しても同じ結論が出る。キリスト教に従えば同性愛は「不自然」であるが、実際はその逆ではないだろうか。

引用・参考文献

海野弘 (2008) 『ホモセクシャルの世界史』 文藝春秋

白倉敬彦 (2005) 『江戸時代の男色』 洋泉社

頼 鉦青 (2008) 「『葉隠』における武士の衆道と忠義」 『言葉と文化 v. 9』

名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻

(<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/9/9-09.pdf>, 2013. 07. 30)

Crompton, L. (2003). *Homosexuality & Civilization*. Harvard University Press

Leupp, G. (1995). *Male Colors – Homosexuality in Tokugawa Japan*. University of California Press

Watanabe, T & Iwata, J. (1989). *The Love of Samurai – A Thousand Years of Japanese Homosexuality*. (Roberts, D.R, Trans.). GMP Publishers Ltd, London